OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「地元学」に基づいた奈良県十津川村における持続可能性の考察と実践
Author(s)	高成, 壯磨
Citation	平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

申請先学部　人間科学部
採択番号　　No.6

平成 27 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	たかなり　そうま 高成　壮磨	学部 学科	理学部 生物科学科	学年	２年
ふりがな 共　同 研究者名	なし	学部 学科		学年	年
					年

アドバイザー教員 氏名	三好　恵真子　先生	所属	人間科学研究科

研究課題名	「地元学」に基づいた奈良県十津川村における持続可能性の考察と実践
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。

１．研究目的

限界集落である奈良県十津川村の持続可能性を支えるための提案を図るため、現地へ実際に赴き、そこに存在する課題や現状を理解する。そして、過疎化の進行に伴い失われていくであろう十津川村独自の伝統や文化、並びに資源や景観を、村外の若い力を巻き込むことで地区の活性化へと繋げていく方法を検討する。

２．研究計画・方法

調査地域：

主に奈良県十津川村神納川地区（五百瀬、内野、山天）

訪問日時と訪問概要：

第１回　６月 20～21 日　※自主研究期間外であるが実費で調査を行った

初回は、上須特任准教授（環境イノベーションデザインセンター：CEIDS）の研究調査に同行し、かんのがわ HBP メンバーの岡田さん、十津川村役場職員の神谷さんらとの会議に同席した。岡田さんが所有する里山とシイタケ廃材の堆積場で見られる生物相の観察を行った。

第２回　８月 12～14 日

神納川地区にある旧五百瀬小学校の体育館で行われた盆踊り会場の設営準備を手伝い、実際に盆踊りにも参加した。その翌日には、岡田さんの現地住民への挨拶回りに同行し、古くから続いてきた神納川の伝統行事である盆踊りについての聞き取り調査を行った。

第３回　８月 27～28 日

地域住民数名とともに、第 4 回訪問の目的となる農作業手伝いの打ち合わせを行った。十津川村歴史民俗資料館を訪問し、資料収集を行った。

第４回　９月 14～16 日

神納川地区在住の高齢者宅での稲刈りを手伝い、作業の合間にはこの地域の農業や林業についての聞き取り調査を行った。同時に、地域コミュニティーの中心である旧五百瀬小学校にある遊具のペンキ塗り・点検や校庭の整備を行った。また、15 日の夜には「とつぷろ」でバーベキューパーティーを開催し、約 10 名の地域の方を招待して親睦を深めた。

第 5 回　10 月 24～25 日

岡田亥早夫さん、中南佐栄子さん、松葉俊子さんのご自宅に訪問し、神納川に伝わる伝統行事についてインタビュー調査を行った。

３．研究結果・考察・成果

計 5 回の訪問調査で得られた内容を、報告と考察を合わせた 3 編のエッセイとしてまとめた。

十津川村農業の新たな可能性

神納川生まれ神納川育ちの岡田亥早夫さん。大学進学・就職のため数年間十津川村から離れていたが、その後 U ターンで故郷に戻ってきた地域の期待を背負う若者の一人である。岡田さんは家業の土木業の傍ら、６年ほど前から個人的にシイタケ栽培に着手し、多い年には約４ｔのシイタケを生産・出荷している。十津川村にある世界遺産、小辺路を歩く人が訪れる無人販売所や十津川村の道の駅、直接契約を結んでいる顧客への販売が主であり、現在は干しシイタケをメインに十津川村独自のブランド確立に向けて日々試行錯誤を重ねている。

写真１　岡田さんのシイタケ栽培の様子

２０１１年３月の東日本大震災での福島原発の事故以来、東北のシイタケ農家は壊滅的なダメージを受けた。キノコ類は放射線を吸収する性質があり、被爆食物としての風評被害が拡大した。商品としてのシイタケだけではなく、東北の木材をシイタケの原木にすることもできなくなった。原木栽培のシイタケは一つの生産地を失ってしまった状況にあったのだが、岡田さんはその空いた市場のスペースを狙って「十津川産の原木シイタケ」という新しいブランド作りを目指している。山に囲まれた十津川村には、浄化されたきれいな空気や水があり、標高が高く涼しい気候もシイタケ栽培に適していると言える。大きな消費地である大阪や奈良の都市部までは離れているものの、干しシイタケにすることで鮮度の壁は超えることができる。まだまだ知名度が低い十津川産シイタケであるが、今後有名なブランドになることが期待できる。

また、岡田さんが掲げる理想の農業スタイルはシイタケのブランド化だけにとどまらない。ホダ木の寿命は５年ほどであるが、栽培が終わったホダ木を自然の力を借りて堆肥に変え、ブルーベリーやカシスの栽培に利用し、その後も多くの栄養分を必要とするニンニクやサツマイモ栽培に利用するという循環農法を目指している。聞き取り調査では、試作段階のブルーベリーやサツマイモを見せてもらったが、他のものよりのびのびと葉を茂らせているように見えた。また、ベリー系やクルミを植えることで、神納川地区を横切る世界遺産・熊野古道の小辺路を歩く人たちの軽食になってもらえればと岡田さんは話していた。十津川産の木材を利用し、十

津川が誇るきれいな環境を活かしながら、自然の恵みを無駄なく利用していくスタイルこそ、長期的な地域の農業を考える上で非常に重要なことである。

写真２　循環農法のサツマイモ畑

神納川地区盆踊り

2015 年 8 月 12 日水曜日。この日は、神納川地区で 6 年ぶりに盆踊りが開催された。第 2 回の現地訪問はこの盆踊りに直接参加し、地域の伝統行事について調査することが目的であった。

当日、会場となったのは平成 17 年に廃校となった旧五百瀬小学校の体育館である。当時は神納川地区で生まれ育った子どもたちはみなここの小学校に通っており、地域住民の深い思い入れがあったが、子供数の減少を理由に廃校となってしまったのである。そんな状況下で、「このままではまずい」と現状に危機感を持ったメンバーで組織されたのが「神納川農山村交流体験協議会（かんのがわ Happy Bridge Project（以下 HBP)」である。これは、「過疎地域」である神納川地区に残る日本の原風景や温かい人の心を都市部に住む人にも伝えようという取り組みで、奈良県の都市部に住む子どもたちを神納川地区の農家民宿に呼び農業体験等を提供する「子ども農山漁村交流プロジェクト（長期宿泊体験のモデル地区)」を実施していた。

しかし、無情にもこの事業の妨げとなる天災が十津川村を襲った。2011 年 9 月 3 日～4 日ごろの台風 12 号台風による大水害である。神納川区では、幸いにも人的被害や家屋崩壊などの被害はなかったが、道が崩壊し土砂崩れが起きた。十津川村内外をつなぐ国道 168 号線などが通行不能となり、また電線や電話回線、インターネットも通じなくなってしまったため、十津川村は一時全村孤立した状態に陥った。

水害からの復興後、HBP のメンバーは子どもたちの受け入れを継続に躊躇していた。地区の高齢化が進み、農家民宿のお母さんは旦那さんに先立たれ独り身となった方もいる。また、先の水害を鑑みて、もし子どもを受け入れるのであれば食糧や毛布など万全な体制を整えなければならないとの認識もあった。この時、「あ、ここで区切りをつけるところかな」と HPB メンバーの岡田さんは思ったと話して下さった。行政からの補助金も終了したため、このプロジェクトは現在一時休止状態になっている。

水害以来、地域住民の努力もあり通常の生活を送ることができるようになっていたが、過疎地域であることは変わらず、むしろ将来に希望を見出せない兆しも見え始めていた。まだ 30 代で小さなお子さんを持つ岡田さんは神納川地区の活性化に奮起しているが、住民の中には地区の将来に対して消極的な方もいるという。

十津川村において、夏の盆踊りは一大イベントである。十津川村役場の HP や Facebook ページでは、地区ごとの盆踊り開催状況が村内外に向けて発信され、親戚一同が故郷に集まり皆で楽しむ機会になっている。神納川地区では、十数年前までは毎年実施され地域コミュニティー

の形成・維持の中心を担っていた盆踊りだが、高齢化が進むにつれてまばらな開催になっていた。大学進学や就職のために一度村を離れていた岡田さんが 7 年前に U ターンで神納川に帰ってきてから 2 回連続で盆踊りを開催したが、その時に垣間見えたいくつかのデメリット（歌い手がいない、開催時にかかる負担が大きい）のためにここ数年は開催を見送っていた。

しかし、十津川村に移住してきた村役場の神谷さんという信頼のおける協力者や、この春には神納川地区に二人の移住者が来るなど、新しい風が吹いていた。そこで、岡田さんは 6 年ぶりとなる盆踊りの開催に踏み切った。踊りを知っている高齢のおばあちゃん方を集め、踊りの振り付け指導を依頼した。告知はあまり積極的には行わず、地区内に張り紙を掲示することや、回覧板を回す程度であった。当日、祭りらしさを出すために軽食も準備した。岡田さんの奥さんはクッキーを焼き、お母さんは岡田さんが作ったシイタケで炊き込みご飯をこしらえた。夏の暑い時期であったのでビールやジュースをたくさん準備し、神納川渓流でとれたアマゴ（サツキマス）の燻製も作った。また、盆踊り開催を聞きつけ、地域のお母さん方はたくさんのキュウリやトマト、漬物を届けてくれた。

そして迎えた盆踊り本番。会場の体育館前には地域住民が手書きでそれぞれの思いを絵にした灯篭が並んでいる。18 時の開始直後はまばらにしか人はおらず、3 時間以上にもわたる盆踊りが続くのか不安に思えた。私はおぼつかない足取りで（私は地域の方と同じ動きができていると思っていたが、最後まで足の動きは揃わないままだったらしい）踊りに参加していた。はじめは婦人会の白い浴衣に身を包んだおばあちゃん以外の参加者はあまりいなかった。だが、だんだんと人は増えはじめ、体育館の壁に寄りかかって見物しているだけではなく、体育館中央の踊りの輪に加わる人も増えていった。会場の雰囲気が盛り上がってくるのと同時に、長老の方も自らマイクを取り独特な囃子の盆踊り歌を歌っていた。あまりにも楽しく、当初予定していなかった歌まで即興で踊ることになり、盆踊りが大好きなおばあちゃんでさえも、振り付けを思いだせないというハプニングもあり、会場は和やかで楽しい雰囲気に包まれていた。すべての踊りを終えると、時刻は 20 時を回っていた。

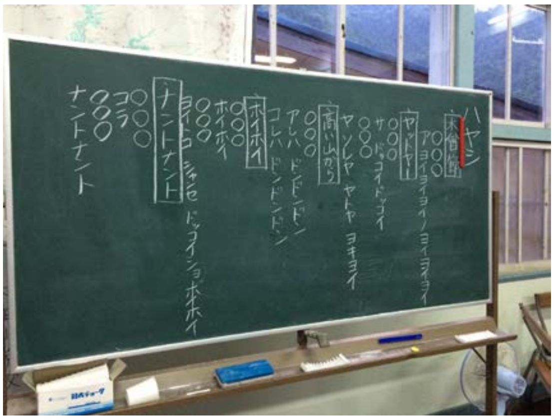

写真３　盆踊りで歌われたハヤシ

そのあとは、みなさんおまちかねのカラオケタイムである。ステージに登壇前はみな恥ずかしがり遠慮する姿を見せるものの、いざ歌い始めるとノリノリで歌うお父さんお母さんがとても印象的であった。地域のイベント用に、小学校のステージ裏にはカラオケセットが用意されているのだが、「盆踊りをやるなら是非カラオケもやりたい！」との要望があったそうだ。踊りが終わって、みな体育館の床に腰を下ろしステージでの熱唱を見ている。この場には、地域の方々のお子さん、お孫さん、曾孫さんまでがたくさん集まり、非常に活気のある雰囲気があった。21 時からの余興では、DJ の移住者の方がバンドでの歌を披露したり、岡田さん自身がギターを手に取り歌を披露していた。最後の曲を歌い終わる頃には若者しか残っていなかったが、高齢の方はみな口をそろえて「楽しかったよ、ありがとう」と言って帰っていった。外部参加者の我々から見ても今回の盆踊りは大成功に終わった。

翌日、私は岡田さんと一緒に挨拶周りに行った。祭りの開催にあたって各家から寄付金が集まっていたのである。行く先々で「全部いさおくんのおかげだよ、ありがとう」「久しぶりに元気がある神納川をみれてよかったよ」「また来年もやりたい」との声があり、みな久しぶりの盆踊りに満足している様子であった。

他の地域では、「盆踊り保存会」なるものが結成され、地域の伝統文化保存のかじ取りをしている。今回、盆踊り歌を参照したのも、保存会が作成した神納川地区オリジナルの歌を記した歌謡集であった。しかし、岡田さんは「保存会のやり方では、確実に文化が残っていくけれど、がちがちにやると周りの人が参加しにくい。実際に保存会の人らの発表の場となっている側面もある。」と言っていた。

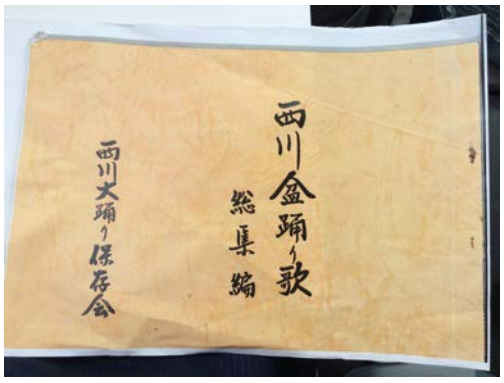

写真４　西川盆踊り歌　総集編

日本各地にある地域の伝統行事を守っていくべきだ、という声がある。過疎化という脅威にさらされながらも、美しい日本文化の多様性を保持するためには必要なことであろう。しかし、その行事の開催自体が負担になり地域住民を疲弊させてしまうのであれば、持続可能性の観点からするとその行為はふさわしくない。むしろ、地域が元気付き、コミュニティーが潤滑に運営されていくようなイベントを、それぞれの集落の余力の範囲内で行うべきである。それが伝統行事が持つ本来の役割と姿ではないだろうか。

フィールドで学ぶ

私は、2015 年前期・共通教育「人間の世界」にて人間科学研究科の中川敏先生から文化人類学の入門となる講義を受けた。中川先生ご自身のインドネシアでのフィールドワークを題材に鮮やかに紹介されていた人類学の世界は、非常に魅力的であり、知的興奮といえるようなワクワクした感情を毎回抱いていたことを今でも鮮明に思い出す。そこで教えて頂いた概念のおかげで、私の人間生活に対する興味は非常に大きくなったが、その中でも「人間は自ら紡ぎだした意味の網の目に支えられた動物である」「文化とはそのような意味の網の目である」というギアツの言葉が最も印象的であった。

実際に私が十津川村を訪れたのは 2014 年 11 月のことである。CEIDS が開講している高度副プログラム「サステナビリティ D ラボ」現地調査に同行し、先生の自家用車に同乗させて頂き十津川を目指した。いつまでも続くと思ってしまうような山道を何時間も揺られているうちに、「本当にこんな山奥に人が住んでいるのだろうか」「なぜ、彼らはこの地に住み続けることを決めたのだろうか」という素朴な疑問が湧いてきた。その 2 泊 3 日での滞在では、インタビューによって言葉の上での解答は得ることができた。ただ、何とも腑に落ちないようなもどかしさがあった。

それ以降、私は計 8 回十津川村を訪問してきたが、最近になってようやくこの地に住み続ける意味の網目が見えてきたように思う。それは情報を論理的に思考した上での納得ではなく、複数回の現地訪問による身体的な経験に依るものだろう。お互いに警戒心がほぐれある程度の信頼が生まれてきたことも一因であるし、最も効果的だったのは第 4 回調査での農作業手伝いであったと私は考えている。始めは「いつもは機械で稲刈りをする。腰を屈めて手で刈るなん

てようやりませんわ」とおしゃっていたが、一緒にお手伝いをしていたメンバーがかなり真面目に働く姿を見て「若いのに、兄ちゃん方よう働いて感心するわ」「高成さん、ジュース１本だけじゃ足りんじゃろ、何本でも飲んでな」と我々のことを受け入れて下さった。後日岡田さんと話をしたが、「田舎の人は仕事に厳しい。でも、頑張っている人は認めてくれる。だから地域のお父さん、お母さんたちは高成くんのことを気に入ってくれたと思うよ」とのコメントを頂いた。また、若者が来て真剣に頑張っている姿を見ることが地域の人たちの活力になっているということも聞かせて下さった。

今回の研究を通じて、学生の身分で調査をすることの難しさを痛感することもあった。しかし、座学で得た知識を活用し、生まれてきた知的好奇心に純粋に応えるという点で非常に面白い一年を過ごすことができた。当初目標としていた地域活性のアイデアを提案することにはまだ調査が不十分であるが、これから十津川村神納川地区に携わっていくにあたってしっかりとした基盤ができたことが本研究の最も大きな意義であると考えている。今後も長期的に研究活動を続けていきたい。

４．謝辞

本研究は人間科学研究科グローバル人間学専攻 三好恵真子准教授の指導の下で実施され、大阪大学環境イノベーションデザインセンター 上須道徳先生からも助言を頂いた。また、学部学生であっても多額の研究費が配分され充実した研究活動を実施することが可能になったのは大阪大学未来基金からの支援があったからである。今回の自主研究にあたってお世話になった方々に深く感謝している。

５．参照

1. 吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波書店（岩波ジュニア出版）213pp.
2. 小田博志（2010）『エスノグラフィ―入門』 春秋社 358pp.
3. 佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの作法　問いを育てる、仮説を鍛える』346pp.
4. 司馬遼太郎（2008）『街道をゆく 12 十津川街道』朝日新聞出版（朝日文庫)183pp.
5. 『読売新聞』 2015 年 10 月 1 日朝刊 「阪大生 地域活性に汗」
6. 『読売新聞』 2015 年 8 月 31 日朝刊 「盆踊り復活 移住 2 人と絆」
7. Web「かんのがわ HBP　HP」＜http://www.kannogawa.com/＞（2015/12/11 アクセス）